

96 せんりゅういん ねほんず
泉龍院涅槃図



指 定 市有形文化財 平成12年 3 月27日
所在地 中小田切
所有者 泉 龍 院



釈迦牟尼（釈迦）は、インドに生まれ、生老病死の四苦を救うために、29歳の時に宮殿を出て苦学苦行をして悟りを得る。そして45年間にわたり法を説き、娑羅双樹の下で入滅した。

涅槃とは、修行によって真理を体得し、迷いや執着を断ち、一切の苦や束縛から解放される最高の境地を言うが、一般的には釈迦の入滅を言う。

涅槃図は、その釈迦の入滅の様子を描いたものである。図柄は北を枕に右脇を下にして臥した釈尊を中心に、阿難尊者や仏弟子、文殊・普賢・観世音・地蔵などの諸菩薩、国王・大臣・長者・児童などの人物のほか、いろいろの鳥獣が描かれている。その種類は52種と言われている。どれもが釈尊の入滅を悼み、泣きむせび、最後の食事を共にした純陀の顔は不安げに描かれている。

娑羅の木は四方に2本ずつある。東方の双樹を常と無常とに、西のものを我と無我とに、南のものを楽と無楽に、北のものを浄と不浄に喩えられている。娑羅双樹は、釈尊が涅槃に入るや、時ならぬ白花を開き、東西と南北との二双樹はおのおの一樹となって林を蔽い、樹色白変して枯れたという。釈尊が生涯用いた鉢盂を入れた袋と錫杖は娑羅樹に掛けられている。雲の上には釈尊の入滅を知らせに訪れた仏弟子の阿那津を先頭に、哀れみのあまり天井から降りられる母摩耶夫人が描かれている。

泉龍院の涅槃図は天保5年（1834）の冬に上小田切村の鷹野叔三（蓼岳）が、23歳の時に描いたものである。蓼岳は、郷土で師に画を学んだ後江戸に出て、狩野探淵斎法眼守貞に師事。帰郷して画・詩歌・押花・謡曲などの風雅を嗜み、人となりも温雅清廉、近隣から敬愛された。47歳で眼疾失明、明治10年（1877）に69歳で病没、泉龍院に大作が残された。